

わが宗教体験の歷程

東 元 慶 喜

一

わたくしの知識生活の焦点にあるものは「原始仏教」すなわちシャカ Sakya（釈迦）族のムニ muni（牟尼＝聖者）、ゴータマ・シッダッタ Gotama Siddhatha（喬答摩・悉達多）と同時代の仏教、さらにその流れをうけついで現在に至っている「南方仏教」すなわち、セイロン（現今のスリ・ランカー）・ビルマ・タイ（古名シャム）・カンボジャ・ラオスの仏教である。

わたくしはこの原始仏教・南方仏教を研究・理解・同感することになり、かなり多量のエネルギーと時間と金銭とをついやしている。

しかしわたくしのころがいかに南方仏教徒であるビルマ人やセイロン人と、深い程度においてかよいあうとしても、わたくしの日常生活はかれら南方仏教すなわちことばをかえれば小乗仏教（ヒーナ・ヤーナ Hīna-yāna）の生活と全くおなじ

いとはいえない。

南方仏教徒は蚊を殺さない。ゴキブリを追いまわさない。

蛇が室内にはいつてきてもそのままにしておくであろう。それだのにどうであろうか。このごろでは東京の生活では蚊を見ることはすくなくなつたが、一匹でも蚊が姿を見せれば、かねて用意しておいた蚊取線香で駆除あるいは撲滅することであろう。すくなくとも蚊の発生しにくいような環境をつくるために、墓場の花たてに水をためておかないとか、溝に石油乳剤を流すかするであろう。そしてそのような生活を文明度の高い生活、すなわち文化生活とよんで、それをよしとするわたくしである。

これは南方仏教、さかのぼって原始仏教の不殺生戒についてのべてきたのであるが、なるほどわたくしは猟銃を使って鳥獣を追い廻すことはしない。またみずから釣糸をたれて魚を釣りあげたりもしない。しかしそれだけでわたくしの日常

生活がまったく「不殺生戒」をおかしていないといえるであろうか。そこにはなお考えるべき問題がのこっていると思う。

わたくしはみずから手をくだして一頭の牛をも殺さないであらう。しかしたれか他人の手をわずらわして殺された牛の肉を料理させて、たべて、うまいとかなんとかいつてよろこぶのである。

わたくしは雑踏する電車やバスにのるのには、東南アジアに住む南方仏教徒のごとくはだしでくらすことはできない。このごろはケミカル・スキン(合成皮革)などの靴もあらわれたが、まだ多くの場合、一頭の牛を殺さなければ、わたくしのはく靴はつくることができない。

たとえ靴をはかないにしても、今日の都会生活では、カーペットのところではスリッパを持参してはきかえるなどのころくばりをして、下駄をはかねばならない。

一足の下駄をもとめるためには、その前提として、一本の桐の木が切り倒されるのをしのばねばならない。

わたくしはこのように周囲を犠牲にすることなくして、一日たりとも、一時たりとも、おのれの生存をつづけることは不可能である。

わたくしは能力のある強いわたくしが、能力のない弱い周囲をふみにじり、犠牲にしてよいという考え方を肯定すること

とができない。

しかしこの世に生をうけたわたくしは、この呼吸のつづきかぎり、生きつづけねばならない。そのためには「自分は自分の力で生きているのだ」と顔をあげて生活するのではなくて、周囲のさまざまな犠牲に支えられてはじめて生活をつづけていることを深く認識し、「おかげさまで生きさせて頂いているのだ」というさんげのうちに生活すべきではあるまいか。

右は「パーナティパーター・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーシ」*Pāṇātipātā veramaṇī sikkhāpadāṇī samādiyaṇī*。(わたくしはいきものをころさないおきてをまもります)という南方仏教徒の在俗者のまもるべき第一戒についてのべたものである。

二

在俗者の南方仏教徒の守るべき第二戒は「アディンナー・ダーナー・ウェラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーシ」*Adinnādāṇā veramaṇī sikkhāpadāṇī samādiyaṇī*である。漢訳では「不偷盜戒」と訳されているから「ぬすみさえしなればよい」と思う人があるかもしれないが同じこの第二戒でも南方仏教の出家者にとっては、もっと重大な、そして深い意味をもっている。これを逐語訳すると「わたくしはあたえ

られないものをとらないおきてをまもりす」ということになる。

これは大へんなことである。木のうえにマンゴーの実が色づいているからといって、南方仏教の僧侶は木にのぼってこれをもぎとることはゆるされない。つまり「あたえられないもの」をとることになるからである。だから果実が熟して自然におちるのをまっけてこれを拾ってたべるわけである。

食卓の上に皿がならべられても、それだけでは南方仏教の僧侶は、その皿の上の食物をみずからとって口に入れることはできない。身辺の世話をしてくれるカッピヤ・カーラカ(Kappiya-karaka (浄人)かダーヤカdayaka (施主))によって三回捧げ持って手渡されてはじめて食事をとることができると思われる。

万事がこの調子である。「控えめ」で「消極的」である。

三

在俗者の南方仏教徒の守るべき第三戒は「カーメース・ミッチャーチャーラー・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤミ」(Kāmesu micchacārā veramaṇi sikkhāpadāṇaṃ samādiyāmi。(わたくしはみだらなおこないをしないおきてをまもります)である。これは性道徳をみださないというおきてである。

この第三戒は出家者になると「アブラフマチャリヤー・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤミ」Abrahma-cariyā veramaṇi sikkhāpadāṇaṃ samādiyāmi.となり、在俗者の場合にはゆるされる夫婦間の肉体関係も禁ぜられることとなる。つまり在俗者のときには「不淫戒」であったのが、出家者の場合には「不淫戒」とかわる。

在俗者も月に四回、新月斎・上弦斎・満月斎・下弦斎にあたっては、「不邪淫戒」でなく「不淫戒」を守るわけである。わたくしはじめにわたくしの知識生活の焦点にとらえられていたものは原始仏教・南方仏教であると書いた。

わたくしは現在曹洞宗の僧籍に入っているが、曹洞宗に関する知識といえば、「正法眼蔵随聞記」を校訂したこと、パリー語の師立花俊道先生の住職をしておられた八王子の松門寺で、昭和二〇年八月一日蔵書を入れてあった地下壕に直撃焼夷弾をうけて、一冊の書物ものこさず悉くうしなわれた先生が、無一物のなかからたちあがってはじめてられた「座禅会」で坐ったくらいのものである。

わたくしは現在妻をもっている。四十二歳このかた二十年つれそってきた妻である。子供はない。

しかしこの結婚生活をとおして思うことは、人類のおよそ半分をしめる異性というもののひとりを愛欲の対象としてもち、煩惱のために悩みくるしむということが、人間に対する

叡智と情熱をはぐくむために、どんなに重要なものであるかということをもつて体験することができた。

「結婚」というものが、もし種族保存、または維持の目的でのみいとなまれるべきものとすれば、わたくしは結婚すべきではなかったかもしれない。

わたくしは昭和十一年五月結核性疾患のために手酷い手術をうけねばならなかった。まかりまちがえば、わたくしはもはや「男性」ではなくなってしまうかもしれない手術であった。腰椎麻酔だけで手術はおこなわれた。手術の途中わたくしはあまりのくるしさにたえかねて、「先生、全部とっちゃってください」とさげんだ。外科医は「全部とることはやさしい。いかに残すかがむずかしいのだ」と荒々しい声で、しかしやさしい心をこめて叱りつけた。

手術は終わった。その結果、わたくしは結婚生活、いやもつときりつめていえば、性生活はできるが、自分の肉体の姿をつたえる子孫をえられぬからだとなった。

わたくしの妻はそのことを承知の上で、貧乏な……といえば家がなく、金がなく、やぶれぶとんにくるまっつてねているわたくしのもとへ、だれの祝福もうけないでポストン・バッグふたつもつてとびこんできた。

愛欲は煩悩であるといにしえのひとはしりぞけた。たしかに愛欲は迷いの根源であるかもしれない。だが人間とうまれ

て愛欲を経験しない人がどこにあらうか。ありとすればそれは不具者である。

わたくしの手術がおわったときに早稲田大学の会津八一博士は、手紙を下さって「近代医学のみぐみによって、邪魔物をかたずけることができたのはひとつのしあわせであると思ふ、これからのちは研究専一に生きぬくように」とはげましのお言葉を頂いた。

しかし外科医の好意ある配慮によって、わたくしは完全に去勢せられるという不幸をまぬがれた。わたくしは男性として生理と欲望をそなえ、そのうえ子孫を得られないことになったのであるから、考え方によってはどんなふしだらなことをしても、なんの結果ものこらないわけで、会津先生の解釈せられたように、そんなに「単純・明快な境地」に達したわけでは決してなかった。

これからのわたくしの心のもちかたによっては「懦弱な人間」におちいる可能性もできてきたわけで、わたくしは身のひきしまるのをおぼえた。

わたくしはこの手術をうけた二五歳よりも八年も前に、すなわち一八歳の暮、すでに「たましいの臨終」を体験していた。

それはわたくしが愛欲について悩んだ最初の経験であり、その結論として、わたくしは「人間は、いやわたくしはその

生命において、また能力において有限であるから、そのおのれの愛の対象を無限に絶対に愛しとおすことは不可能である」と断定した。そしてその結論にしたがえばわたくしは愛欲を否定し、断念すべきであるのに、わたくしの身の内をかじめぐる青春の血潮を抑制しきることはできなかった。

わたくしは「人間の愛」に絶望した。なるほどわたくしの生命は有限ではあろう。また、わたくしの能力は有限ではあろう。だからといっておのれの愛の対象と全く絶縁するということとはたえがたいことであった。

だがわたくしの「子供らしい好意」や「あこがれ」が、その対象の幸福を破壊する原因となったのを知ったとき、わたくしは考えた。「もしもわたくしが真にこの対象を愛するのならば、わたくしはいまだちにこの対象の前から立去るべきである」と。それはまことに切ないことであった。やるせないことであった。

わたくしはその対象にふたたび姿を見せまいと決心した。わたくしがこの地上に生きているということをその対象に気づかせないで、そして自分がかたときもその対象から視線をそらさないで、じっと見守っている。その対象はわたくしがこの地上にいたということを忘れてしまうであろう。そしてそのわたくしがいまもその対象を愛しつづけているということに気づかないであろう。それでいいのだ。いやそれがいい

のだ。

わたくしはおのれ自身にこういきかせた。そして思った。地上のいかなる愛が「そらごと」であろうとも、また「たわごと」であろうとも、わたくしが守るこの「沈黙の愛」こそは「真実の愛」の名に値する愛である。

ただし、事実を告白すれば、その「聖愛」である「沈黙の愛」のとりでを守るわたくしの周囲からおしよせてくる「寂寥の感」をごまかすことはできなかった。

はじめのうちそのさびしさは一種のマゾヒズム的な快樂に似ていた。だがそのうちに四方から押しせまるさびしさはその圧力をましてきた。やがてわたくしの守るとりでを押しつぶしそうになってきた。

わたくしはうたがった。「なにものにもけがされない、真にきよらかな『沈黙』をまもって対象を愛しているわたくしのところに、なぜさびしさがしのびよるのであろうか。いやしのびよるだけではない。そのさびしさはいまやわたくしの全存在をおしつぶそうとしているのではないか。」

わたくしは考えた。「自分は沈黙の愛を高価に評価しておのれ自身をだまし、みずからをなぐさめているのにすぎないのではないか。自分がまもるこの沈黙はなるほど対象を傷つけることはしないであろう。しかしその沈黙の愛はその対象のうえに降りかかるひとつの不幸をもさえぎってやることか

できない。また対象のうえにひとつのちいさな幸福をもあたえることができない。自分はおのれのさびしさをごまかすために、沈黙の愛を過大評価しているのにすぎないのではないか。」

わたくしはその対象がある医師にとついだことを知ったときにも堪えていた。やがて一人の女の子の母親となったこともひとつづつに聞いた。わたくしは「よいおかあさんになってください」と念じた。

ふと気付くとわたくしは疾走する列車の昇降口に立っていた。目の下をかすめて冬枯の大地があとすざりしていた。わたくしは列車から大地に身を投げようとしていた。

最後のとりでとしてとじこもり守っていた「沈黙の愛」がおのれをなくさめる手段にすぎなかったことに気付いたいまとなつては、わたくしは自分の立つべき基盤をうしなつたわけである。

そのときわたくしの脳裡にちらとかすめたものがあつた。それは息子の自殺を告げる電報を手にした母の顔であつた。それと同時に脚だけ折れて死に切れないおのれの姿がうかんだ。

わたくしは生きるには生きられず、死ぬには死なれなかつた。

この行くことができず、ひきかえすことができず、とどま

ることもゆるされぬ絶対絶命の境にあつて、どうして母の顔がわたくしの脳裡にうかんだのであろうか。

わたくしはその刹那まで、この世界にあつて、だれひとり自分のさびしさを理解してくれるものはないと考えていた。

全宇宙がわがむねひとつにのしかかるような、孤独の思いにさいなまれていた。

しかしそうではなかつた。わたくしがひとりで悩んでいると思ひこんでいたとき、わたくしの見ない、わたくしの知らないうしろに立って、わたくしの母はわたくしと同じくしみを、いやそれにもまさるくるしみをかみしめ、たえていてくれたにちがいない。

その母の思いがいつとはしれずわたくしの胸にしみとおつていて、生か死かという瀬戸ぎわに立ったわたくしの脳裡に、電報を片手にした母の顔となつてうかびあがつたのではあるまいか。

わたくしはまことに不孝者である。しかし母はちかかくにあるときはわたくしをみまもり、とおくにいても母のこころは、わたくしをはなれることはない。母のわたくしに対する愛は「絶対」である。

しかしながら、母の愛はいかに絶対ではあつても、母の命が有限であり、その能力が有限であるからには、やはり無限であることはできない。

いかえるならば、母は全宇宙の生命体の本源である「無限絶対者」の分身である。

なやんでいたのはわたくしひとりではなかった。わたくしと同質のくるしみを、いや量においてはわたくしにもまさるくるしみを、母がわたくしともにくるしんでいてくれたと気付いたときに、その絶対ではあるが有限でしかない母の愛をとおして、その有限の母の愛を無限大に押しひろげた「無限絶対者」すなわち「宇宙の本源」に触れた。

わたくしの口からは「南無阿弥陀仏」と称名の声流れ出ていた。

わたくしのころはその瞬間に一〇〇パーセントにみたされていた。

いままでわたくしがきずつけたとなやみ、またわたくしをけがしたとうらんだものも、まことに今日この日あるためにわたくしをみちびいてくれた「善知識」であったとおがまれた。

現在という時点において一〇〇パーセントにみたされたわたくしにとっては「今」はよろこびにみちみちた光明の世界である。

またすぎさった「全過去」は、あの過去あったればこそという感謝のおもいで一杯である。

さらにもし「未来」というものがありとすれば、それは希

望にかがやく世界である。

いにしえのひじりたちはともすれば愛欲に対して否定的であった。なるほど愛欲は煩惱のひとつにはちがいない。

しかしながらもし愛欲がなかったならば、わたくしは現在わたくしがうけているような法悦をうることはできなかったにちがいない。

南方仏教では愛欲のことをタンハー Tanha とよぶ。タンハ―は元来「渴き」の意味である。これはいかにも熱帯らしい表現である。愛欲のくるおしいくるしみをタンハー（渴愛）と表現したのである。渴愛はあらゆる苦の根源であって、これは否定し、たち切るべきものとするのが南方仏僧のたてまえである。

わたくしは知識生活こそ原始仏教・南方仏教に焦点をあわせているが、日常生活は大乗仏教である。

わたくしは思う。いや信ずる。愛欲は煩惱であるがそれは決して斥け、断ち切るべきものではなくて、その煩惱も宇宙にあまねき「絶対無限者」の大いなる摂理、すなわち「おはからい」であると。

わたくしと二〇年つれそってきた妻はもとは仏教徒ではなくて、キリスト教徒であり、聖公会で洗礼をうけている女性である。

わたくしが愛欲を煩惱であるからといってしりぞけず、む

しろそれは大いなるめぐみであると肯定するのは、小乗仏教と大乘仏教の垣をとりぞくだけではなく、仏教徒とキリスト教徒とのへだてをのぞくものである。

四

南方仏教徒の在俗者の守る第四戒は「ムサー・ワルダー・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーミ」*Musā-vāda veramaṇī sikkhāpadāṇi samādiyaṃi*。(わたくしはうそをつかないおきてをまもります)である。つまり「不妄語戒」である。

俗に「うそも方便」などといって、時にはうそも「善意の潤滑油」として肯定されることがある。

しかし南方の仏僧はわたくしの知るかぎり、原則として、偏屈と思われるぐらいうそをつかなかった。

五

南方仏教徒の守る第五戒は「スラー・メーラヤ・マッジャ・パマーダッターナー・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーミ」*Surā-meraya-majja-pamādatthāṇā veramaṇī sikkhāpadāṇi samādiyaṃi*。(わたくしはちけのみ、だらしないことをしないおきてをまもります)であり、つまり「不飲酒戒」である。

南方の仏僧も、在俗者も酒杯を手にしない。わたくしも現

在原則として酒はのまない。しかしわたくしの場合には南方仏教の戒律を厳守してのまないのではなくて、主として健康状態が思わしくないからである。

禅宗ではおもしろいことに、この理性を麻痺させる飲物を「船若湯」とよんで愛用している。

六

右にのべたのは南方仏教徒の在俗者ならびに出家者が日常守る五戒であった。

このほかに第六戒として出家者は毎日、在俗者は月に四日だけまもるおきてがある。

それは「ウィーカーラ・ボージャーナー・ウェーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーミ」*Vikālabhojāṇā veramaṇī sikkhāpadāṇi samādiyaṃi*。(わたくしは時間を過ぎて、食事をとらないおきてをまもります)すなわち「不受非時食戒」である。

「時間を過ぎて」というのは何時を過ぎてという意味であろうか。それはその土地の一二時すなわち正午を過ぎては食事をとらないということである。

厳密に言えばドロップ(あめ玉)とかジュースのたぐいは午後もとってさしつかえないことになっている。

南方仏教の僧侶は朝六時、昼は一〇時すぎ一二時までには食事を終わらねばならない。そして午後はそのものをたべない。

南方仏教の僧侶のように静かに僧院内に生活していて、炊事も自分ではしないような具合だとこれでよいかもしれない。消極的な非生産的な生活といわなければならぬ。

また午後食事をしないということは内臓の安静をたもつ意味において衛生上よいことであろう。

しかし京都で夕食をとって新幹線にのり、夜一〇時は東京の自宅にかえるというような、苛烈・迅速な生活をしている日本人にとって、誰かれとわず要求できるおきてとはおもわれない。

七

南方仏教の在俗者は月に四日の齋日には舞踊をしたり、歌を唄ったり、音楽を聞いたり、観劇はできないことになっている。

南方仏教の僧侶、それはまだ比丘でなくて沙弥であっても、出家者はことごとくテレビドラマなどは見てならないさだめである。

すなわち「ナッチャ・ギター・ワーディタ・ウィスーカダッサナー・ウエラマニー・シッカーパダン・サマーディヤー」*Nacca-gita-vādita-visūkadassanā veramanī sikkhāpadān samā-dhiyāmi.*（わたくしは舞踊・歌謡・音楽・観劇をしないおきてをまもります）である。

わたくしは自分が演劇を愛好するからいうわけではないが、これらの諸芸術が煽情的な、煩惱を増張させるはたらきをする場合も数多くあることではある。しかしながらその一事をもつて芸術全体を否定し、排斥しようとするのは甚だもつて狭量であり、偏狭である。

芸術はたしかに「変型せられたる性欲」であり、「煩惱の表現」ともいえる。

しかし芸術表現に参加し、または芸術を観賞することによって、おのれのところが、「あたためられ」、「ひろげられ」、「やわらげられ」、「たかめられる」事実を何人も否定できないと信ずる。

南方仏教の僧侶がこれら諸芸術に対して否定的であり、また無関心なのは、かれら自身の生活の充実のためにはなはだ残念なことである。

八

南方仏教の僧侶はネックレスすなわち首飾りや香水・塗香その他の装身具を用いない。これは「かざるところ」すなわち虚栄心を抑制するためであろう。

それは「マラー・ガンダ・ウィレーパナ・ダーラナ・マンダナ・ウィブーサナッターナー・ウエーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤー」*Mālā-gandha-vilepana-dhāraṇa-manḍana-*

vibhūsanāthāna veramaṇi sikkhāpadāri samādiyāmi. (わたくしは花鬘・薫香・塗香を身につけ飾らないおきてをまもりまします)である。

在俗者は前にのべた舞踊・歌謡・音楽・観劇を禁ずる第七戒とともにこの第八戒を一緒にして第七戒とするのがつねである。

すなわちつぎのごとくである。

「ナッチャ・ギータ・ワーディタ・ウイスーカダッサナー・マラーラー・ガンダ・ウイレーパナ・ダーラナ・マンダナ・ウイブーサナッターナー・ウエーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーン」Nacca-gīta-vādīta-visūkadassanā-mālā-gandha-vilepanadhāraṇa-mañḍana-vibhūsanāthāna veramaṇi sikkhāpadāri samādiyāmi. である。

南方仏教の僧侶は髪を刈るのではなく、剃るのである。わたくしはなぜバリカンで刈ったのではないのか、かみそりで剃らなくてはならないのかときいてみた。

その答えは次ぎのようであった。

「カミソリで剃らないで調髪すれば、ポマードとかコスメチックとかヘアークリームとか、戒律で禁ぜられている薫香や塗香を使用せねばなくなる。それでは都合がわるい」といふのである。

「かざらない」ということはたしかに美德ではある。しかし容姿をととのえたり、衛生的必要から整髪剤を使用するこ

とまで禁ずることはないと思う。

九

南方仏教の在俗者は月に四回の齋日には高い大きな臥床に寝てはならないことになっている。

南方僧は常住いつでもこの戒律をまもらねばならない。

すなわち「ウッチャー・サヤナ・マハー・サヤナー・ウエーラマニー・シッカーパダン・サマーディヤーン」Uccāyana-mahāsāyana veramaṇi sikkhāpadāri samādiyāmi. (わたくしはたかいおおきなふしどにやすまなのおきてをまもりまします)がこれである。

実際にはどうするかというと、ベッドのマットレスをはずして、板の上に棕櫚をあんだアンペラをしき、その上にシーツをかけてねるわけである。

わたくしはビルマ滞在の三カ月は僧院生活であったが、最後の一カ月は病院生活であった。病院では仏僧といえどもベッドの上にマットレスをしきことをゆるされたが、いよいよ帰国直前病院から僧院にうつされた夜、マットレスのない板の上の寝床が病める身にいかに苦痛に感ぜられたことであるうか。

はなしはそれだが、わたくしは昭和一八年結核性疾患のため右腎臓剔出手術を受けていたので、熱帯の風土が合わなかったのもあろう。それにわたくしは朝はほとんど毎朝午前

二時に起床するが夜は夕食がすむとテレビも見ないで、グッスリ眠るのが常である。

ビルマの座禅堂すなわちサーサナータの生活は午前二時起床・午後一〇時就寝であつから、これがひどくからだにこたえたものとみえて、血圧が下り最高九〇という状態におちついた。

わたくしのからだは、熱帯生活・集団生活には、不向きになつてゐるらしく思われる。

一〇

右にのべた九戒を在俗者は第七・第八戒を一つにまとめて、八斎戒アツタンガシーラ *Aṭṭhaṅgasilā* とよんでいる。ここまでは在家者と出家者と共通の戒法である。

ところが第一〇戒になるとちがう。この戒法をたもつか否かによつて在家者であるか出家者であるかがわかるからである。

すなわち「ジャータ・ルーパ・ラジャタ・パティッガハナー・ウエラマニー・シツカーパダン・サマーディヤーミ」*Jātarūpa-rajata-paṭiggahana veramaṇi sikkhāpadāṇa samādīyāmi.*（わたくしは金・銀をうけないおきてをまもりまします）がこれである。

貨幣経済の今日の時代に金銭を授受しないで生活するといふことは大変めんどうなことである。

これはもっと現代的な見地に立ちこの戒法の意味をふかくとらえて解釈せねばならぬであらう。

一一

新参の出家者、すなわち沙弥（サーマネーラ *samaṇera*）にとつてまずまなばねばならない七五の規則がある。衆学法（セーキヤー・ダンマー *Sekhiya dhamma*）がこれである。

最初の二六条は着衣法そのほか俗家に近づくおりの作法をのべている。

それによるとつぎのごとくである。

（一）パリマンダラン・ニワーセツサーミーティ・シツカー・カラニーヤー。 *Parimaṇḍalaṇi niwāsesaṇṇī sikkhā karaṇīyā.*

南方僧侶は現在でも釈尊と同時代のような三衣一鉢の生活をしている。それは仏陀の教の正風をつたえるという意味から、無意味とはいえないが、わたくしの師立花俊道先生のおことばを拝借すれば「あまり衛生的な服装とはいわれない」といつてさしつかえない。

わたくしが受けた沙弥出家式の経験によればパンツも腹巻もアンダーシャツもみんなはずされて、素肌の上に下衣（アンタラワーサカ *antaravāsaka*）をまきつけ帯（カーヤ・バンドナ *kāya-bandhana*）でしぼるのである。

そのとき下衣はへその上から膝の下までぐるりとまきつけ

ねばならない。

(二) パリマンダラン・パールピッサミティー・シッカー・カラニーヤー。Parimaṇḍalan̄ pārupissāmīti sikkhā karaṇīyā.

南方仏僧は下衣を下半身にまきつけてから、上衣すなわち鬱多羅僧(ウッタラーサンガ utarāsaṅga)を着ける。精舎のなかにいるときは右肩を露出した偏袒右肩(エーカ・アンサ ekānsa)である。

ウッタラーサンガすなわち上衣は前後にたれさがらぬように、両方のふちを同じ高さにまとわねばならない。

(三) スパティッチャンノー・アンタラガレー・ガミッサミティー・シッカー・カラニーヤー。Supaticchanno antarahare gamissāmīti sikkhā karaṇīyā.

精舎のなかでは右肩を出しているが、外出して在家者に接するときには、通肩すなわち両肩をおおわねばならない。

(四) スパティッチャンノー・アンタラガレー・ニシーディッサーミティー・シッカー・カラニーヤー。Supaticchanno antarahare nisidissāmīti sikkhā karaṇīyā.

在俗者の家に行つて出家者が坐るときには肌を露出しないように注意しなければならない。

(五) スサンウトー・アンタラガレー・ガミッサミティー・シッカー・カラニーヤー。Susānvuto atarahare gamissāmīti sikkhā karaṇīyā.

(六) スサンウトー・アンタラガレー・ニシーディッサーミティー・シッカー・カラニーヤー。Susānvuto antarahare nisidissāmīti sikkhā karaṇīyā.

出家者は在俗者の家に行つたり座に着いたりする場合、行・住・坐・臥の四威儀を作法正しくせねばならない。

(七) オッキッタチャック・アンタラガレー・ガミッサミティー・シッカー・カラニーヤー。Okkhitcakkhu antarahare gamissāmīti sikkhā karaṇīyā.

(八) オッキッタチャック・アンタラガレー・ニシーディッサーミティー・シッカー・カラニーヤー。Okkhitcakkhu antarahare nisidissāmīti sikkhā karaṇīyā.

出家者は在俗者の家に行つたり、そこで座につく場合、キョロキョロ室内を見廻したり、落着かぬ態度をとるべきではない。視線を下方に向けているべきである。

(九) ナ・ウッキッタ・カーヤ・アンタラガレー・ガミッサミティー・シッカー・カラニーヤー。Na ukkhitakāya antarahare gamissāmīti sikkhā karaṇīyā.

(一〇) ナ・ウッキッタ・カーヤ・アンタラガレー・ニシーディッサーミティー・シッカー・カラニーヤー。Na ukkhitakāya antarahare nisidissāmīti sikkhā karaṇīyā.

出家者は在俗者の家に行つたり、座席につく場合に裾をまぐつたりして着衣を引上げてはならない。

右に列挙した(一)から(一〇)までを、タイ国ではパ
リマンガラ・ワツガ *Parimaṅḍala-vagga* という。上田天瑞師は
経分別(南伝卷二・頁三〇一)に全円品と訳された。これは(一)
の最初の文句をパリ(全)マンガラ(円)と解したものである。
紙面が限られているので全部を掲げることにはできないが、
(二六)までは出家者が在俗者に接する場合の心得を規定し
たものである。

笑声をたててはならない(一一・一二)とか、高い声で話
してはならない(一三・一四)とか、からだや手や頭をふっ
たりしてはならない(一五―二〇)といった規定がある。手
を腰にあてて肘をはってはならない(二一・二二)。頭や顔
をつつんだり(二三・二四)、いざりのように歩いたり(二
五)、みだれがましい姿勢をしてはいけない。(二六)

(二七)から(五六)までは食事の作法である。手で直接
に食物を口に運ぶ習慣を今も保持している南方仏教徒と生活
がヨーロッパ化して、ナイフやフォークを使用し、箸をもも
ちいるわれわれ日本人とでは生活様式が異なるから、いかに仏
陀の制定せられた規則であるとはいえ、それをそのまま続け
て実行せねばならぬとは考えられない。

要はその精神をくんで、形にとらわれず仏陀の正意を伝え
ればそれでよいと思う。

そのあと一六条(五七)―(七二)は説法に関する規則で

ある。

(五七) ナ・チャッタ・パーニッサ・アギラーナッサ・ダ
ンマン・デーシッサ・サーミーティ・シッカー・カラニーヤー。
Na chatṭapaṇissa agilānassa dhammaṃ desissāmiti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに日傘を手にした求道者に法を説く
べきではない。

(五八) ナ・ダンダ・パーニッサ・アギラーナッサ・ダン
マン・デーシッサ・サーミーティ・シッカー・カラニーヤー。
Na daṅḍapaṇissa agilānassa dhammaṃ desissāmiti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに杖を手にした求道者に、法をとく
べきではない。

(五九) ナ・サッタ・パーニッサ・アギラーナッサ・ダン
マン・デーシッサ・サーミーティ・シッカー・カラニーヤー。
Na sattaṭṭapaṇissa agilānassa dhammaṃ desissāmiti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに刀剣をたずさえたものに、法をと
くべきではない。たとえそれが王者であつても聞法のときは
帯剣をはずさねばならない。

(六〇) ナ・アーウダ・パーニッサ・アギラーナッサ・ダ
ンマン・デーシッサ・サーミーティ・シッカー・カラニーヤー。
Na āvudḍapaṇissa agilānassa dhammaṃ desissāmiti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに刀剣以外の武器すなわち鎗・弓・
斧・楯等をたずさえた求道者に法を説くべきではない。

(六一) ナ・パードウカ・アールルハッサ・アギラーナ
ッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニ
ーヤー。Na pādūkārūhassa agiānassa dhammaṃ desissānīti sikkhā
karaṇīyā.

(六二) ナ・ウパーハナ・アールルハッサ・アギラーナ
ッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニ
ーヤー。Na upāhanārūhassa agiānassa dhammaṃ desissānīti si-
kkhā karaṇīyā.

チルダーズ氏の巴英辞典によれば(六一)の女性名詞パー
ドゥカー pāduka は「靴」「スリッパ」となっており、(六
二)の女性名詞ウパーハナー upāhanā は「靴」「サンダル」
と見える。いずれにしても履物のことである。南方仏教の在
俗者は出家者の部屋に入るのには、聞法のとぎでなくとも、
かならず履物をぬがねばならないさだめである。

(六三) ナ・ヤーナ・ガタッサ・アギラーナッサ・ダンマ
ン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na
yānagatassa agiānassa dhammaṃ desissānīti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに乗物に乗って行く人に法を説くべ
きではない。

(六四) ナ・サヤナ・ガタッサ・アギラーナッサ・ダンマ
ン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na
sayanagatassa agiānassa dhammaṃ desissānīti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに、臥床に伏している求道者に法を
説くべきではない。

(六五) ナ・パッラッティカーヤ・ニシンナッサ・アギラ
ーナッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カ
ラニーヤー。Na pallatthikāya nisinnassa agiānassa dhammaṃ
desissānīti sikkhā karaṇīyā.

説法者は病気でないのに、みだれた姿で坐っている者に法
をとくべきではない。

(六六) ナ・ウエーティタ・シーサッサ・アギラーナッサ
・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤ
ー。Na veṭṭhisasassa agiānassa dhammaṃ desissānīti sikkhā
karaṇīyā.

説法者は病気でないのに、頭被(ターバン)をまいた者に法
を説くべきではない。

(六七) ナ・オーグンティタ・シーサッサ・アギラーナッ
サ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニー
ヤー。Na oḅḅṭhisasassa agiānassa dhammaṃ desissānīti sikkhā
karaṇīyā.

説法者は病気でないのに面を覆っている者に法をとくべき
ではない。

(六八) ナ・チャマーヤン・ニシードイトワー・アーサネ
ー・ニシンナッサ・アギラーナッサ・ダンマン・デーシッサ

ーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na chamāyaṃ nisiditvā āsane nisinnassa agiānassa dhammaṃ desissānti sikkhā karaṇīyā.

説法者が地面に坐っていて、座に坐っている病気でない人に法を説くべきではない。

(六九) ナ・ニーチェー・アーサネー・ニシーディトワー・ウッチェー・アーサネー・ニシンナッサ・アギラーナッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na nice āsane nisiditvā uce āsane nisinnassa agiānassa dhammaṃ desissānti sikkhā karaṇīyā.

説法者が低い座席に坐っていて、高い座席に坐っている病気でない人に法を説くべきではない。

(七〇) ナ・ティトー・ニシンナッサ・アギラーナッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na thito nisinnassa agiānassa dhammaṃ desissānti sikkhā karaṇīyā.

説法者が起立して坐っている病気でない人に法を説くべきではない。

(七一) ナ・パッチャトー・ガッチャントー・プラトロー・ガッチャンタッサ・アギラーナッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na pacchato gacchanto purato gacchantassa dhammaṃ desissānti sikkhā karaṇīyā.

説法者があとから行きながら、さきに行く病気でない人に法を説くべきではない。

(七二) ナ・ウッパテーナ・ガッチャントー・パテーナ・ガッチャンタッサ・アギラーナッサ・ダンマン・デーシッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na uppathena gacchanto pathena gacchantassa agiānassa dhammaṃ desissānti sikkhā karaṇīyā.

説法者がわるい路を歩きながら、よい道に行く病気でない人に法を説くべきではない。

右の一六条すなわち(五七)より(七二)に至る規則は説法者としての尊厳と権威を保たしめようとするものであり、またこれを裏返しにして解釈すれば、病めるひとびとに対するいたわりの精神をもって貫かれていると考えることができる。

(七三) から(七五)に至る三条は今日の言葉で表現すれば「衛生」とか「公害」に関することである。

(七三) ナ・ティトー・アギラーノー・ウッチャーラン・ワー・パッサワン・ワー・カリッサーミーティ・シッカー・カラニーヤー。Na thito agiāno uccāraṃ vā passāvaṃ vā kariṣṣānti sikkhā karaṇīyā.

病気でなければ立ったままで糞便排せつまたは放尿をすべきではない。

日本では便所の様式が洋式の水洗便所にかわりつつあり、糞便は腰をかけて、放尿のみのときは立ったままで用を足すのが普通である。

わたくしの観察したかぎりでは南方仏教の僧侶はほとんどことごとく、昔の日本の女性のようにしゃがんで用をたしていた。

生活用式が変化すれば規則や戒律の内容も解釈も次第に改められてくるべきで、あまり偏狭になるべきではなからう。

(七四) ナ・ハリテー・アギラーノ・ウッチャーラン・ワー・パッサワン・ワー・カリッサミーティ・シッカー・カラニーヤー。 Na harite agiāno uccārñ vā passāvāñ vā khelañ vā karissāñti sikkhā karañyā.

病気でない人は青草の上に糞便・放尿をすべきではない。

(七五) ナ・ウダケー・アギラーノ・ウッチャーラン・ワー・パッサワン・ワー・ケーラン・ワー・カリッサミーティ・シッカー・カラニーヤー。 Na udake agiāno uccārñ vā passāvāñ vā khelañ vā karissāñti sikkhā karañyā.

病気でない人は水の上に糞便・放尿・咯痰をすべきではない。

東南アジアの諸国を見ると、川は「便所」にひとしく、また「洗面所」でもあり「浴場」でもあり「流」(ながし)でもある。

一一

わたくしは前にものべたように右腎臓剔出手術をうけていたという病歴のために熱帯の生活にたえられなくて、沙弥戒はうけたものの具足戒(ウパサンパダー upasampadā)は受戒することができないままに帰朝せねばならなかった。わたくしの知識生活の焦点はこのように「原始仏教」・「南方仏教」に集中せられているが、わたくしの日常生活はそうではない。

わたくしは妻を持ち、金錢を授受し午後も食事をし演劇をこよなく愛する大乘仏教徒である。このわたくしの知識生活と日常生活とは一見相反する矛盾したもののようであるけれども、「諸行無常」「一切皆苦」「諸法無我」の三法印によってつらぬかれて一味である。

わたくしはこの文中「たましいの臨終」ということばで「入信の体験」を表現した。それはきわめて浄土教的な色彩をもつものと領解されたことであろう。しかしわたくしの「浄土」は決して十萬億仏土のあなたにあるのではない。全過去の総合計として、また全未来の母胎として、わたくしがいまここで吸いこみ吐き出す一息のなかに一切がある。もしも「永遠の生命」というものがありとすればそれはわたくしがいま吸いこんで吐き出すことのひといきのなかにある。わたくしのよるべはほかにはない。このひといきを真剣に生きぬ

わが宗教体験の歷程（東元）

くところに「生命の道」がひらけている。